

お告げのマリア修道会

まごころ会

2025年1月
Tel.095-846-8300QRコードから
アクセスして
下さい

『わたしは主のはしためです。』

お言葉どおり、この身になりますように。』

聖年の歩みの中で

「お告げのマリア修道会」の発足から
50周年を迎えます。

令和六年12月29日、浦上教会の聖年の扉が開かれました。令和七年は、長崎大司教区が、信徒発見から160年、原爆投下から80年を迎える年です。

そして、私たちは、「聖婢姉妹会」から「お告げのマリア修道会」と名称を変更し、正式修道会として発足してから50年を迎えます。聖年の歩みの中で、節目となる時を迎えることができることをとてもうれしく思うとともに私たちに惜しみなくお恵みを注いでくださる神様に、また、これまでの歩みを支えてくださった数知れない多くの恩人の方々に心から感謝をお捧げしたいと思います。

25周年を迎える前に作成した「礎・お告げのマリア修道会史」の中に掲載されている記事を通して、私たちがいただいたお恵みを振り返ってみたいと思います。長い記事ですので、数回に分けて掲載させていただきます。

浦上教会にて
聖年の扉をたたく中村大司教様

「人の思いをはるかに超えて」梅木公子
— キリシタンの乙女たち

1873年2月24日、
1873年から1873年に及んだ

礎



キリシタン弾圧の高札が下ろされた。

1868年に始まったキリシタン総流刑で浦上を離れていたキリシタンたちは、流刑地から帰村した。これに先立って、1865年には大浦天主堂サンタマリアのご像の前で、イザベリナ杉本ユリがプチジャン司教に「ここにおります私たちは皆、あなた様の心と同じにございます」と、潜伏キリシタンの残存を告げました。長崎における信徒発見である。

1873年禁教令解除は日本カトリック教会において記念すべき日である。同じくお告げのマリア修道会にとってもそうである。「創立者は誰ですか？」と問われて返事ができない修道会は稀だろう。しかし、お告げのマリア会は創立者を特定できない。「創立者は神様」これが会員の一致した結論である。

迫害に次ぐ迫害、キリシタン根絶のための拷問、弾圧、流配、処刑、この苦難の日々に、神はお告げのマリア会をご計画なさり、その種をみ手に育んでおられた。禁教令が解除されたとき、神は最も貧しく、虐げられたキリシタンの村々にこの種をまかれた。この種は235年の時を費やして、培われたふくよかな信仰の土壌で、1874年に芽を出す。種を播かれ

↓裏面に続きます

まごころ会会員帰天、お祈りください

- ・マグダレナ 新川 キミ様 青砂ヶ浦教会
- ・モイゼス 田端 保様 太田尾教会
- ・ヨハネ 鈴木 芳典様 紐差教会
- ・Fザビエル 赤窄 耕一様 楠原教会

たのは神、種を受けたのはキリシタンの乙女たち。そして水をやり育てるのはパリミッシヨン会及び教区の司祭たちである。お告げのマリア会は、当初から司祭、教区と一体になつて歩みが続けていく。学問もない。その日暮らして、追われる極貧のキリシタンの乙女たちに、修道院創設など大それた目的はなかった。彼女たちはそのようなことさえ知らなかったが、「親方様（司祭）の声は神様の声」であることを信じて、疑わない純粋な信仰の持ち主たちであった。その日暮らしの貧しさと司祭への無条件の従順、これがお告げのマリア会、独特の清貧と従順である。1956年まで誓願の恵みさえなかったのに、会員たちはこれを体験で覚え確かなものにしていく。

二 外国人宣教師と共同体

1874年6月、長崎港外の島々に赤痢が発生し、長崎地区全域に蔓延した。大浦天主堂に居住していたパリミッシヨン会のマルコ・ド・ロ師には、西洋医学の知識があり、すぐに患者の救済に乗り出した。人々は、患者を置き去りにして逃げたが、キリシタンたちは、ド・ロ師の呼びかけに応じた。なかでも流配地、鶴島から帰村したばかりの岩永マキらの奉仕は、献身的で合宿をしながら、患者の中に入つていった。伝染病が終息したとき、彼女たちの合宿所には伝染病で親を亡くした一人の孤児が残されていた。寄る辺のない孤児と暮らす彼女たちの共同生活は、

その後ド・ロ師の指導を

受けて、修道会の形を取る

ようになり、これが十字修

道院と浦上養育院の起源と

なった。ちなみに、浦上養

育院は日本で最も古い養護

施設である。この共同体のリーダー格だった



岩永マキがお告げのマリア会の創立者とされがちだが、似たような経路で同じような共同体が生まれ、これらが後に統合して、聖婢姉妹会からお告げのマリア会となつていくのであつて、彼女を会全体の創立者とするには無理がある。下五島では、当時半ば公然と行われていた間引きの運命にある子供たちが発端となった。キリシタンの産婆が五島を巡回していた。同じく、パリミッシヨン会のマルマン師に放置されたまま、死を待たれていく子供たちのことを報告した。師はすぐに子供たちを引き取り、村のキリシタンの人々を集めて世話をさせた。彼女たちの何人かは独身のまま子供たちに奉仕する道を選び、ここでもまた修道院と養護施設が生まれた。奥浦修道院と奥浦慈恵院であり、その年譜によれば、1880年のことである。上五島、北松、平戸地区でもブレル師、マトウラ師の呼びかけにキリシタンの乙女たちが同じように応え、指導を受けながら共同体をつくつていった。初代プチジャン司教、二代クセン司教を経て、1927年初の法人司教、早坂司教様を迎えるまで、長崎教区にこのような共同体15を数えるに至つた。この間、共同体の間にわずかな交流は見られるものの、それぞれの歩みは独自のものである。共通するのは司祭への無条件の従順と貧しさである。彼女らは受け継いだ信仰によつて同じ価値観の中で生きていた。このことが後に山口司教様の呼びかけによる統合を可能にし、寄り合い所帯をひとつの大きな共同体へ変えていく力となる。

